

藤岡蔵六論 (中)

関口安義

前号に続いて、ここでは藤岡蔵六の一高時代から東京帝国大学文科大学哲学専修を経て大学院・哲学研究室副手時代、そして欧米留学までを扱う。はじめに一高時代の芥川龍之介・井川恭・長崎太郎らとの友情、彼らとの赤城・榛名方面への旅を記し、大学時代の芥川との親しい交流も書いた。菅虎雄邸訪問や漱石山房をくぐったことなどにも言及した。大学院から副手時代は、もっぱら研究に打ち込み、時間を惜しんで勉強する。そういう中でカントやデカルトに関するすぐれた論文が書かれる。けれども、この頃から他者への配慮を欠いた性行が目立つようになり、いち早く東北帝大の哲学教官の口を見つけ、フライブルグ大学への在外研究に出かけてしまう蔵六を、後年の彼の悲劇を頭に置いて描いた。その唯我独尊的人生観が、祖父元甫、父春叢ゆずりのものであったことも考察した。

キーワード：井川恭、芥川龍之介、哲学、新カント派、在外研究

六 友情

一高時代の藤岡蔵六は、とにかく真面目な学生であった。彼はただひたすら真理を追求しようと、さまざまに修養をこころがけた。先にも述べたが、入学当初

の岡田式静座法もその一つであった。毎日早朝、彼は日暮里の本行寺で行われていた静座会に行き、岡田虎次郎と向き合い、三十分から一時間練習してから寮に戻り、食事をすると、生活がしばらく続いた。そのせいか健康は申し分のない状態となった。

次に海老名弾正が牧師であった本郷教会（本郷弓町

教会)に出席し、海老名の説教に聞き入り、さらに近角常觀の求道学舎に浄土真宗の教理を聴きに行った。彼は人生の根本原理を追求する哲学の世界にあこがれた。聖書を読み、他方『教行信證』や『歎異抄』などにも目を通している。けれども蔵六は、友人長崎太郎とは異なり、宗教に没入することはできなかった。キリスト教や浄土真宗への関心も、彼にはあるところまで行くと、人間の理性が顔を出し、その門への出入りを抑止するのであった。彼はその思いを『父と子』に、「私は哲学を捨てて宗教へ走ることが出来なかつた。私が宗教の門へ入りかけると何時も其処に哲学の眼が監視していた。私は此の門衛から通用證を買つことが出来なかつた」と記している。彼は哲学をしつかり学ぼうとした。そういう彼の目には、いま一人の友人井川恭が、クローズアップされるのであった。

すでに前号で書いたように、井川恭とは入寮早々親しくなり、その交流は一高在学中ずっと続いた。井川は島根県松江市の出身。島根県立第一中学校(現、島根県立松江北高等学校)を卒業後、消化器の病で三年間の療養生活を送つて後の一高入学であった。一八八八

(明治二一)年十二月三日の生まれなので、蔵六より三歳ほど年長であった。療養生活中に文芸の創作に親しみ、地元松江の新聞『山陰新聞』、『松陽新報』のほか、『八ガキ文学』や『萬朝報』¹⁾に短歌や詩や小説を發表し、『都新聞』の懸賞小説には、井川天籟の名で応募した「海の花」が一等入選、三五〇円という大金を獲得するなど、その文学歴には輝かしいものがあつた。しかし、彼はそのことを蔵六をはじめとする級友に語っていない。「能ある鷹は爪を隠す」というよりも、学内の『校友会雑誌』以外で活躍していることは、隠して置いた方が無難であつたのだ。

井川恭は後年の法哲学者恒藤恭である。彼は京都帝國大学に進み、法哲学や国際法を専攻、学者としての道歩んだ。彼はまた芥川龍之介の親友としても知られる。井川恭の一高時代の日記、「向陵記」には、芥川との交わりはもとより、恭と蔵六二人の交流もかなりくわしく記されている。また、井川のエッセイ「むさし野」²⁾は、二年生時代の一九二一(明治四五)年二月十一日の休日、藤岡蔵六と二人して武蔵野のおもかげの残る東京市内を散策した記録である。蔵六と恭の

親しい交流を示すものとして注目される。二人は寮を出てハイキングの気分で、雑司ヶ谷墓地から戸山方面へ弁当持ちで出かけた。エッセイ「むさし野」の一節を引くなら、以下のようだ。

日は暖かく成つた、学習院の塀に沿つて行くと
目白の停車場の辺をりに出る、線路の下のアーチを潜り抜けると、武蔵野に特有な丘と丘との間の谷で、四五寸伸びた麦の緑りがやはらかに目にはひる。
右手にかなり勾配の急な坂があつて此あたりには珍らしくも赤松の林が一とかたまり丘の肩から腹にかけて茂つて居る。

小川を飛び越え、くぬぎの木立赤まつしの林を登り抜けて頂に来ると、幅が五六間、長さが一町ばかり夷ならかな草原がある、あなたでは枯れ木に蝙蝠傘を結へつけて鬚をつくり髭の生へた人が写生をして居る。

どかり枯れ草の上に腰を下ろして持つて来た弁当をひらいた。

「弁当がけで出るなんて久しぶりだ」

とF君がわらふ。

右の文のF君が藤岡蔵六であり、井川にとつて好ましい蔵六の性格・人柄が活写される。井川は一年生時代は南寮十番に属し、後年東大総長となる矢内原忠雄や日本赤十字社中央病院長となつた都築正男、それにアメリカのジョンズ・ホプキンス大学留学中に若くして亡くなつた森田浩一らと交わつた。特に森田とは、写生の趣味を共有したこともあつてか親しく、彼の故郷、東京多摩の熊川村（現、福生市）に泊まりがけで出かけ、多摩川畔で絵筆を振るつたこともある。他方、一年生時代を南寮八番で送つた蔵六は、第一部甲類入学の杉村英三郎と親しむ。杉村は東京出身ながら、田舎者のような感じがあり、西郷隆盛を尊敬していた。

二年生になつて、寮の編成替えて蔵六は、中寮三番に入る。そして同じ部屋で井川恭や芥川龍之介と起居を共にするようになった。当時の井川は、芥川が「気鋭の人新進の人 恒藤恭⁴」で、「恒藤は朝六時頃起き、午ひるの休みには昼寝をし、夜は十一時の消燈前に、ちあんと歯を磨いた後、床にはひるを常とした

り。その生活の規則的なる事、エマヌエル・カントの再来か時計の振りかと思ふ程なりき」と評したように、健康第一の学生生活を送っていた。それは中学校卒業後三年もの闘病生活と深くかかわっていたのである。蔵六もまた中学校卒業後一年間、療養生活を送っていた。そのこともあつて早寝早起き、健康第一の生活が身につけていた。『父と子』には、「中学卒業の頃から私は少し身体具合が悪くなつた」とあり、療養かたがた受験準備をしたことが記されている。そういう二人には、自ずから健康あつての人生という考え方が早くから定着していたかのようである。一高生活最後の一学期を、二人は小石川区上富坂に新築落成した日独学館の一室で送ることになる。

日独学館は『父と子』によると、「三並(良)先生が独逸人教会の牧師シュレーデルさんとの共同経営で、小石川上富坂に新築され、高校専門学校の生徒と大学生とを収容する一種の学寮」である。日独学館に移るや、その交わりはいつそう繁くなる。毎朝行われるシュレーデル主催の早天礼拝に、蔵六は「朝、歌を歌うと好い気持ちになるので大抵出席した」(『父と子』)と

いう。が、蔵六は相変わらずの社交下手、同室の井川恭に對してすら、うち解けない態度をしばしば示していた。一高を卒業した年の夏八月、蔵六が井川恭に送った便りが、井川の「翡翠記」に「Fの手紙」として収められている。一部を引用しよう。

暑くなつたね。今が土用の真盛りだ。君には別にお変りも無いさうで結構々々、僕も例の通りぶら／＼暮らして居る。実はもう君から何か便を云つて寄越すだらうと待つて居た。その待ちあぐんで居た処へ八月一日付けのお手紙が舞込んで来た。久しく君と話をしなかつた様に思われるのでとゞろく胸を抑へながらそこにある一文字たりとも逃すまじと息もつがずに読み耽つた。繰り返してまた読んで見た。面と向つて話して居る時少しも気付かなかつた君のパソナリチーの或る部分が特別に明るい色彩と輪郭とを以つて僕の心に攻め寄せて来る様に思はれた。そして僕が耐へがたい苦しみとなつて湧みて来る、日独学館に居た頃僕の君に對する態度のあまりに余所々々しく親しみに

薄かつた事を許して呉れ玉へ。僕は充分君を尊敬もし愛しもして居た。それなのに僕の頑固なそして遊戯的皮肉な心が知らずく僕を駆つて、ともすれば君に衝突かうとする様なおそろしい振舞に出さしめるのであつた。君よ併しながらかゝる振舞は要するに僕の欠点には相違ないけれど決して僕の真意では無かつたのだ。僕自身はもう少し物やさしい親みのある人なつかしい人間であると心に思つて居る。ただそれを巧く否巧妙でなくとも好い、率直にありのまゝ表現するをなし得ない人間なのである。単に君に対する時のみではない。僕が総ての人に対する態度が斯うである。是は甚だ宜くない。是非改め度いと思つてゐる。(略)

併しながら僕が已に大盤石の上に悠然として静座して居るものであるかの様に君が考へるならば、それは大なる誤りである。「否誤りでは無い、どうしてもそう思はれる」と主張するならば君は僕の様子のシャインのみを見たものである。僕には君と類を異にした(異つてないかも知れないが)不安があり煩悶がある。その込み入り方を比較す

るには及ぶまい。人は到底他人を完全に理解する事は出来ないものであるから(他人のみでは無い、自分自身の理解すら覚束ないが)僕は敢て自ら落付けない心の浪立ち騒げるものであるぞと述べたのではない。これは「事実」の為め「相互了解」の為一言したまでである。

この便りには、蔵六の本心が示されている。井川の便りを「とゞろく胸を抑へながらそこにある一文字たりとも逃すまじと息もつがずに読み耽つた。繰り返してまた読んで見た」と友への親愛と信頼の情を示し、日独学館時代の共同生活を振り返り、「僕の君に対する態度のあまりに余所々々しく親しみに薄かつた事を許して呉れ玉へ」と謝罪する。その上で「僕は充分君を尊敬もし愛しもして居た」と言い、それなのに余所余所しくなり、時に衝突く行為に出たのは、自分の欠点であつて真意ではなかつたと弁明する。蔵六は自分は「率直にありのまゝ表現するをなし得ない人間なのである」とも言っている。ここに藤岡蔵六後年の悲劇の一端を読むことができるのである。

藤岡蔵六はとにかくまじめな、世間知らずの、社交下手な人間であった。芥川龍之介や井川恭はそういう蔵六青年を理解した。寄宿寮を共にする生活の中で、彼が裏表のない人間であり、真理を求めてやまない理想主義者であることがわかってくる。

『芥川龍之介全集』には藤岡蔵六宛の芥川書簡が十四通収録されている。どれもが若き日の一高・東大時代のものである。読書の感想、近況報告、中に「路」と題する対話劇もある。芥川は一高時代、大学ノートほぼ一冊分に「椒図志異」と題して、妖怪談を集め記録していたが、一九二二(大正元)年八月二日付藤岡蔵六宛書簡に、その反映が見られる。以下のようにだ。

Mysteriousな話を何でもいゝから書いてくれ給へ、
文に短きなんて謙遜するのはよし給へ

如例静平な生活をしてゐる時に図書館へ行つて怪異と云ふ標題の目録をさがしてくる此間稲生生物怪録をよんだら一寸面白かつた其外比叡山天狗の沙汰だの本朝妖魅考だの甚現代に縁の遠いものをよんでゐる何でも天狗はよく「くそとび」と云ふ鳶

の形をして現はれるさうだ「くそとび」は奇抜だと思ふ

また、一高卒業直後の一九二三(大正二)年七月二十二日付芥川の藤岡宛便りには、寮生活不適應組の芥川の嘆きが記されていておもしろい。長くなるが、芥川と藤岡蔵六との交流の深さと、当時の芥川の読書や学寮生活をめぐる感想が記されているので、全文を引用する。

藤岡君

まづ返事の遅くなつた事をゆるして貰はなければならぬ卒業式から今日まで人に訪ねられたり人を訪ねたり殆寧日なくらしてしまつた花蟲の芥子がさく、ちる、犬の子が生れる、柘榴がさく茄子がなる、とつとつ玉蜀黍がなる迄殆何もせず電車にのつたり人とアイスクリームをのんだりしてゐたその為に方々からくる手紙もよんでは机のひき出しへ入れよんでは机のひき出しへ入れて返事をかく暇が一寸見あたらぬ暇はあつてもが

かりして一寸かく気にならない僕の性分上返事の遅くなつたのは当然として君もゆるしてくれる事だらうと思ふ

唯少しよんだよんだと云ふ中には古ぼけた蘆初新誌や剪燈新話や五才子書や金瓶梅のやうな小説が多い横文字の本は殆よまなかつた昼寝は随分する夜遅くかへつた翌日は時のゆるすかぎり十時頃からさへ寝るだから頭は割合にいゝ体も平調だ尤も胃が少し悪いやうな気もするが大した事はない

一、二年の成績を見に学校へ行つた時に小栗栖君にあつた外は誰にもあはないかうして偶然一緒になつた二十何人かは又偶然行路の人になつてしまふのだらうと思ふ

考へてみれば僕は太へんいゝ時に高等学校を卒業したやうに思はれるこんなに未練なくこんなに思慕の情を持たずに母校を去ることは滅多に出来るもんぢやあないしじみ僕は僕の学校と寮とに対する反感を完全にしてくれた点に於て瀬戸先生と瀬戸先生の教育方針とに感謝しなければならぬと思ふその上僕は僕の中学を出た一高の先輩に対

する尊敬と愛情とを全然失つた点に於ても「寮」及「寮」の組織する人々に感謝したいと思ふ僕等が一高へはいつた時僕らの先輩は僕らを迎へる会を江智勝でひらいたその時の記憶は今でも鮮かにこつてゐる彼等は僕らに中学の生活の point をを力説したそれから寮の生活の自由で愉快な事を繰返した単純な素朴な中学の生活になれた僕らは如何に彼等の真面目な話に敬聴したらうけれども不幸にしてこれらの真摯な話をきくと同時に僕らは又彼等が麦酒を鯨飲するのを見ないわけにはゆかなかつた彼等が余興の名の下にでかんしよをうたひ逆立ちをするのを見ないわけにはゆかなかつた更に彼等以外の一高生がシヤツ一枚に袴をはいて爛徳利と下足札とをたゝきながら point と称する悪戯を廊下から廊下に演ずるのを見ないわけにはゆかなかつた彼等が中学の生活を point と云ふのも無理はない この時から始まつた division は卒業迄つゞいたがうしてしかく「寮」に謳歌する先輩を尊敬することが出来るだらうと云うて彼等と共に中学の生活を point と云ふ名の下

に一笑しざる事が出来るだらう弊衣の如くぬぎす
てた一高生活を顧ることにそゞろにチエスタアト
ンの語を思出さずにはゐられない

The wise men are those who have comedies in their
heads and tragedies in their hearts.

僕はかく頭には喜劇を胸には悲劇を蔵して人生の
道上をあゆまなければならぬ君の二枚目のはが
きは大へん面白くよんださうしてそれが当然だと
思つたこれは君ばかりぢあない年々ひらかれる中
学の同級会に出る度に僕も今更のやうに感ぜず
はゐられない事の一であるかうして皆他人になつ
てゆくんだなと思ふ俺は俺だけだと思ふ時には肉
親の *parents* へ利害関係の一致しない時には存外
弱いものかもしれない(世間一般の上から)とも
思ふ要するに我々は失望する為に生きてゐるのか
もしれないけれども失望しきつた処には自ら新し
い望が芽ぐむ雑草をむしりとつたあとの土でなけ
ればヒヤシンスの花はさかない *distillation* を経過
したあとの心に生まれたのぞみでなければ力つよ
いのぞみとは云はれない僕等はさびしいけれどそ

れだけさびしくない人よりは強いと思ふ

之で筆をさしおくベコニアの赤い花にほひのうす
い鳳仙花猫がなく昼のひざし 君の健康を祝し
且祈る

龍

芥川龍之介は藤岡蔵六を自分と同じ部類の人と見立
て、さまざまの感想を述べているのである。読書への
強い願望や哲学的思索、それに感受性など、二人には
共通項が多い。

また、同年九月五日付便りには、当時の芥川の読書
体験が語られ、最後には「秋の歌」と題した短歌十三
首も添えられている。芥川の藤岡蔵六への親愛を示す
便りなので、これも全文を引用する。

君の手紙をもらつたのは四日の夜遅くであつた投
函の日付は二日になつてゐるこれから返事を出し
たのでは間にあはないかなと思つたが兎に角出し
てみる半切をかひにゆくのも LETTER PAP
ERをかひにゆくのも両方共きらした今は億劫だ

から一帖一錢五厘の紙で間に合はせる

東京へかへつてから何と云ふ事なくくらしした罪と罰をよんだ四百五十何頁が悉心理描写で持ちきつてゐる一木一草もneoの心理と没交渉にかゝれてゐるのは一もない従つてpsic的な所がない（これが僕には聊物足りなく感ずる所なのだが）其代りラスコルニコフと云ふneoのカラクタアは凄い程強く出てゐるこのラスコリニコフと云ふ人殺しとソニアと云ふ淫売婦とが黄色くくすぶりながら燃えるランプの下で聖書（ラザロの復活の節ヨハネ）をよむsceneは中でも殊にtouchingだと覚えてゐる始めてドストエフスキーをよんで大へんに感心させられたが英訳が少ないので外のをつゞけてよむ訳には行かないで困る ブランドはよんだかね

僕はブランドにそんなにうごかされなかつた今よんだらどうだかしらないが イブセンでは僕は「人形の家」と「ガブリエルボルクマン」が一番すきだ夏休の始にヴィリエ リイル アダンの「反逆」をよんだ『人形の家』に先立つた『人形

の家』と云はれる程この戯曲は人形の家と同じ様な題材を取扱つてゐるのが面白い一八七〇年に出たのだから「人形の家」より余程先に（人形の家は一八七九年）性の關係の問題を捉へてゐる事になる この間近郊をあるいたもどこにも「秋」が来てゐる玉川の河原へ来たら白い礫の間に細い草がひよるひよるとはえて黄色くくれかゝつた空に流れてゐる雲までがしみじみ旅でもしてゐるやうな心もちをよびおこさせる日野 立川 豊田

玉川の沿岸の村々は独歩のむさし野をよんでから以来秋毎に何度となく行つた事がある村である櫛の肌が白く秋の日に光る頃になると茅葺の庇につもる落葉の数が一日一日と多くなる村の理髪店の鏡の反射にうす赤い窓の空ではけたゞましく百舌がなき蹴うぶの黒犬も気安くあるいてゆく街道の日なたには紺の手甲をかけた行商人の悠々とした呼声がきこえる村役場の柵にさく赤いコスモスの花にも小さな墓地にさく桔梗や女郎花にもやさしい「秋」の眼づかひがみえるではないか
秋が来るのが待遠い

秋の歌

金箔に青める夕のうすあかりはやくも秋は
ふるへそめぬる
秋たてばガラスのひびのほの青く心に来る
かなしみのあり
秋風よユダヤ生れの年老いし宝石商もなみ
だするらん
秋風は清国名産甘栗とかきたる紅き提灯に
ふく
額縁のすゝびし金もそこなくほのかに青
む秋のつめたさ
銀座通馬車の金具のひびきよりいつしか秋
はたちそめにけむ
鳶色の牝鶏に似るベツツオルド夫人の帽を
秋の風ふく
仲助の撥のひびきに蝋燭の白き火かげに秋
はひろがる
夕雨はDOMEの上の十字架の金にそゞげ
り秋きたるらし(ニコライ)
すゞかけの鬱金の落葉ちりしける鋪石道の

霧のあけ方

やはらかき光の中にゆらめきて金の一葉の
おつるひとゞき
わくらの葉の黄より焦茶につつりゆくつらさ
びしさにたへぬ心か
九月五日朝

藤岡君案下

龍

実にいい手紙である。これだけの分量と内容をもつた便りの存在は、芥川と藤岡蔵六とのかわりがいかに深かったかを示すものである。出陣の「藤岡事件とその周辺」には、芥川・井川・藤岡を「仲のいい三羽鳥」と評した箇所があるが、一高時代の蔵六をよく捉えたことばである。一高卒業に際しては、蔵六は芥川・井川、それにしばしば宗教談義を交わし、最後の一学期をともし日独学館で過ごした長崎太郎(長崎は弟次郎と同室)と四人で赤城・榛名方面への卒業記念旅行を楽しんでいる。四人の旧制高校生は、一九一三(大正二)年六月二十二日の早朝、上野駅に集合、旅に出た。足尾鉄道の一小駅、上神梅(かみかんばい)で汽車を降り、渡良

瀬川の溪谷を後にして、ゆっくり歩いて赤城山の山裾に分け入り、夕方大沼おほのに着き、湖畔の宿に泊まった。

彼らのこの旅行は、これまで恒藤恭の「赤城の山つづじ」によって語られることが多かったが、蔵六もまたこの卒業記念旅行について書き残していた。『父と子』の「一一八 一高卒業記念旅行」がそうである。ついで引用されたことのない文献なので、さわりの部分を示そう。

赤城の山道は険阻だった。四人は喘ぎ喘ぎ登ったが、もう頂上近いと思われた頃、路が急に開けて、眼前に一大パノラマが展開した。一同は思わず声を放って感嘆した。看よ！ 前方遙か大沼湖の水が紺碧に光っている、湖辺から緑の牧場が続いて、放牛が、白樺の林、それを点綴する紅い躑躅つばきの間を、長閑に遊んでいる。私はこんな高い山の上に、こんな広々とした美しい景色があるとは思わなかった。これは全く天上の楽園だと思った。四人は勇躍して湖畔の旅人宿に着いた。皆で宿帳をめくって居ると、村田祐治先生の名が

見付かった。先輩河合榮治郎さんも来てるぞと誰かが叫んだ。四人は愉快に話しながら食事をした。

山頂湖畔の朝は冷んやりと爽快だった。湖上には淡靄が立ちこめて居た。朝食を済ませてから湖辺に聳える小高い山に登った。山には一面に高山植物が寶石のような花を咲かせていた。午前中に赤城を下り榛名へ向った

なかなかの文才を感じさせる文章である。井川恭の「赤城の山つづじ」と対になるものだ。「湖辺に聳える小高い山」は、黒檜山くろひのまである。蔵六と芥川は二十五日に連れ立って帰京した。井川と長崎はさらに妙義山から軽井沢に向かった。

蔵六と芥川は大学に入っても親しい交わりが続く。一高を卒業した年の一九二二（大正二）年十一月十六日には、共に一高のドイツ語の恩師菅虎雄を鎌倉に訪ねている。そのことは芥川の井川恭宛書簡（一九二二・一一・一九付）に見ることができる。二人は夕方五時ごろ江ノ島の栄螺さざえを手みやげに菅の家を訪ねたのである。以下芥川書簡を要約するかたちで、菅虎雄邸訪

問のようすを記そう。

二人が菅の家を訪れた時刻は、「鼠がゝつた紺にぬられた木造の西洋建の窓」にもう灯があかくさしていた。案内されたのは二階の菅の書齋であつた。戸口には斑竹へ白く字をうかせた聯がかかつている。書齋に入ると、四方の壁に隙間なく書幅がかけてある。すべて中国人の書で、それが読めそうもない字ばかりである。紫檀の机の上には法帖と藍い帙ちぢに入った唐本とが堆うたがく積んである。隅のちがい柵の上には古びた銅の置物と古めかしい陶器とが並んでいる。芥川の觀察は細かく、「すべてが寂然として蒼古の色を帯びてゐる」との感想をもらしている。菅虎雄は能書家としても知られていた。一八六四(元治一)年十月十八日の生まれなので、藤岡や芥川とは二十数歳の年齢差があつた。三年前に彼は妻を亡くし、残された五人の子どもの養育に当たっていた。女中を二人雇つてのことである。芥川書簡はそうした管家の家庭的事情も伝える。芥川は菅の能書家としての力量を高く評価する。菅は芥川と藤岡を前に「此の夏休みには日に一万字づゝ書かうとしたがどうしても六七千字どまりぢやつた」

と語る。そういう菅に対して芥川は、「先生にとつて独乙語の如きは閑余の末技に過ぎないのであらう」との感想をもつ。蔵六とて同様であつたであろう。佐賀県生まれの書家中林梧林の話や他の書家の話、中国清朝の書家李瑞清の法帖を示しての書談義は尽きることがなく、汽車の最終に乗り遅れた二人は、菅邸に泊まることになる。若き藤岡蔵六の青春の一コマが、芥川書簡に鮮やかに書き留められたこととなる。

一方、藤岡蔵六も菅邸訪問のことを書き残していた。「十一月中頃、私は芥川と連れ立って、鎌倉に在る菅虎雄先生のお宅を訪問した。先生は一高の独逸語教授だったが、書道の大家であつた所から、話は自然書道を中心として勢はずんだ。先生は筆を執り、半紙の上に健腕直筆振りを發揮しつつ、色々な書体を説明実演された。漱石は文章は巧いが、字はわしに叶わなんだ」とは先生の御自慢話、漱石と先生とは昵懇の間柄であつた(『父と子』二二二)との記事がある。

芥川と菅虎雄邸を訪ね、一泊して帰宅した十一月十七日、郷里の父が危篤の報に接し、蔵六は故郷の愛媛県北宇和郡岩淵村に帰る。父春叢は既に息絶えていた。

数え七十五歳の死であつた。『父と子』には、「私は父の遺骸の前に座つて拜んだ。熱い涙が留め度なく出るのをどうすることも出来なかつた。何故私はもつと早く帰宅出来なかつたか？ いいえ何故もつと早く生れて来なかつたか？ 私が生れた時、父が洩らしたと言ふ一言、そして私が東京初上りの際にも言つたその一言、「もう遅い」という言葉、運命を暗示するかの様なその一言を思い出して、私は暗然とした」とある。

七 哲学への道

一九一三（大正二）年九月、藤岡蔵六は東京帝国大学文科大学哲学専修に入学した。一高在学中から神を求め、真理とは何かに思いをめぐらしていたこともあつて、哲学科への進学は当然の帰結であつた。友人井川恭と長崎太郎は、京都帝国大学法科大学政治学科に、中寮や北寮でいっしょだつた芥川龍之介や成瀬正一は、東京帝国大学文科大学の英吉利文学専修に進んだ。

当時東大の哲学科の教授には、ドイツ系のロシア人

ケーベルがいた。蔵六は哲学概論をケーベルから学んだ。ケーベルは翌年教職を退くから、蔵六は最後の生徒であつた。講義は英語でなされた。『父と子』には、「講義中に盛んに希臘語と羅典語とが連発されるので、当時未だ是等の古典語を習得していなかつた私は頗る閉口した。先生はプラトールを尊重された。ファイヒンゲルの「かのように」(Als ob)の哲学を、愚者の哲学だと評された言葉は今だに私の耳に残っている」とある。大学では他に桑木巖翼の認識論の授業を受けた。

東大哲学科時代の蔵六は、一意勉強に打ち込むことになる。が、時々劇を観に行き、芥川龍之介とは比較的良好につき合つていた。芥川も一高時代の親友井川恭が京都に去つたこともあり、寂しさをかこつていたので、二人はよく会つては話をした。芥川の井川恭宛書簡には、しばしば蔵六の名を見出す。例えば一九一五（大正四）年四月十四日付には、「年少しすぎに、三並さんと藤岡君が来た」とあり、同年七月十一日付のものには、「藤岡君はプラトン全集を懐にして御嶽へ上つた」の記事がある。すでに述べたように、芥川は吉田弥生との恋が養家の反対で実らなかつた時、その悲

しみを短歌に籠めて示し、蔵六に送っている(一九一五・三・九付)。

芥川は失恋の悲しみを親友井川恭の故郷松江で癒すことになるが、その際自筆絵はがきに一文を添えて東京の蔵六に送ることになる。文面は「松江へ来てからもう十日になる大抵井川君とだべつてくらしめてゐる湖水や海で泳いだりもした本は殆よまない少し胃腸でよわつてゐる松江は川の多い静な町である町はづれの八アン先生の家もさびしい井川君のうちは濠の岸にある濠には蘭や蒲が茂つてゐる中で時々かいつぶりが鳴く丁度小さな鳴子をならすやうな声だ廿日頃に東京にかへる 勿々ノ十四日午後(一九一五・八・一四付)となつてゐる。松江到着一週間程後の便りである。

卒業間近の翌一九一六(大正五)年六月一六日付藤岡蔵六宛芥川の便りには、「君の方はいつから休みになる僕の方は十五日が試験の最後の日だからそれから一月位東京にゐてそれからどこへかゆかうと思つてゐるまだどこもきまらない試験は今まで毎日いい加減にうけたから格別苦しくもなかつたお互に文学士になるのだと思ふと可笑しいその内にひまがあつたら来ない

かノ芥川生」とあつて、二人の交流の様がうかがふ。

また、大学在学中に蔵六は、早稲田南町の漱石山房に連れて行つてほしいとの便りを芥川に出している。芥川の返信が残つており(一九一六・六・二二、同二五付)、卒業寸前の木曜日、蔵六は芥川に導かれて漱石山房をくぐつたことが知れる。芥川には、木訥で勤勉な蔵六が好ましく思われたのである。

一九一六(大正五)年七月、藤岡蔵六は東京帝国大学文科大学哲学科の哲学専修をトップで卒業した。卒業論文は「カントの『純粹理性批判』に現はれたる時間論」であつた。これは後で活字になるので読むことができる蔵六の数少ない研究物の一つである。論は「感性論」「時空論」「直観論」「時間及内官に就いてのより深き考察」「Schemaとしての時間」「Analogieとしての時間」「反対説」「総括」の全八章から成る。芥川の一九一五(大正四)年十二月三日付井川恭宛書簡に、「藤岡君がカントを論文にかく、カントのZeitの見方はヘルグソンのZeitの見方と共に誤りだと云ふ事を beweisendするのださうだ」とある。意気揚々とした蔵六の姿が浮かぶかのようである。

卒業式では総代を務めた。在学中は井上哲次郎、桑木敏翼両教授に可愛がられたとは、子息藤岡真佐夫の言である。卒業後蔵六はそのまま大学に残り、一九一〇（大正九）年七月まで大学院に籍を置き、在学中の一九一七（大正六）年四月から一九二一（大正一〇）年三月まで哲学研究室の副手として勤務した。副手時代の蔵六は、井上哲次郎が主宰する総合雑誌『東亜之光』の編集に携わっている。一時は編集主任をつとめた。

大学院時代から副手時代にかけて、彼はカントやデカルトを研究する。そして大学卒業論文「カントの『純粹理性批判』に現れたる時間論」を、『哲学雑誌』第三五五号から第三五七号（一九一六・九〜一一）に載せたのを皮切りに、以後『疑惑と哲学』（『哲学雑誌』第三六一号、一九一七・三）を書き、さらに「認識の根拠」（『哲学雑誌』第三八二、三八四、三八七号、一九一八・二、一九一九・二、五）などを発表している。

この頃の彼の哲学論文以外の文章に、『哲学雑誌』第三八六号（一九一九・四）に載った『岡本春彦遺稿』を読み、がある。これは彼の論文とは違って、その人柄や真意が読めるもので貴重だ。『岡本春彦遺稿』

は矢野禾積編、一九一八（大正七）年十二月二十日付で、私家本として刊行されたものである。矢野禾積は後年の詩人・英文学者矢野峰人の本名である。A5判三五〇ページを越える大冊である。西田幾多郎の序文がついている。岡本春彦は西田によって「象徴主義の青年哲学者」と呼ばれた思想家。一八九四（明治二七）年一月一日、愛知県海西郡平島村に生まれ、一九一八（大正七）年一月十九日、満二十四歳の若さで、この世を去っている。蔵六より三歳若い。

『岡本春彦遺稿』は、京大哲学科の卒業論文「シェリングの象徴思想」を巻頭に、「詩論」「翻訳」「詩歌」の四部から成る。分量的には「シェリングの象徴思想」が三分の二の二四〇ページ余を占める。次いで詩歌が四〇ページほど収録されている。岡本には日記四巻も存在したというが、本書には収録されなかった。「懐遊誌」とか「命」と題された「岡本日記」が復刻されていたならば、同時代研究の貴重な資料に成り得たことであろう。

蔵六は編者の矢野禾積から本書の寄贈を受けた当初、あまり興味を覚えず、何となく開いて見たところ、西

田の序文に接して多少の興味をそそられ、中の二、三行を読み下したところ、「直ちに次の一二行が迫るが如き勢いを以て私の視覚に襲ひ來つた、それがまた次の数行へと電の如くに運び去られて、もう私は読まずに居られないと云ふ気持ちの下に、博士の美しい優しい而も威嚴のある氣高い文章を読みつゞけて居たのである」とまず書く。その上で「内からこみ上げて来る涙と俱に序文を読み了つた私は熱した眼を直ちに『略伝』に移した」とし、「未知の友の一生の数奇なる運命を予想して見た」とも書く。

蔵六は本書を読み終え、「誠に君の思想はその学的なると詩歌的なるとを問はず常に象徴的神秘的であつたと云つてよい」とし、「深く事物の奥底に分け入りそこに普遍的真理を探り恒久の生命を捉へんとして純なる心に情熱の力を籠め肉の命の限りを尽して悪戦苦闘せられた君の一生こそは短いながらに意味深い象徴の歴史ではなかつたか」と言う。

蔵六は岡本春彦の学的業績にくわしく言及し、また、その詩歌を絶賛する。終わり近くで、岡本の詩に触れて、「君は歌声も悲しく祈らざるを得なかつたのであ

る」と言い、罪を懺悔し、神を求める岡本春彦の心情に迫る。「その声は余りに悲しい」と蔵六は書く。四百字詰原稿用紙にして約十八枚、遺稿集を十分に読み込んだ上での誠実な所感の披瀝である。結びの文章は、「誠に真に君は、人生の沙浜を、悶へつゝ悲しみ、悲しみつゝ歌ひながら、二人してはてしもなく、歩みつづけた人であつた。その歩みは、二十五年の短きに尽きたとは云へ、その足跡は、神の聲音の象徴として詩歌の中に永への韻律を鳴りひゞかせて居る」となっている。若き藤岡蔵六の真率な叫びが、ここに読みとれ、純な感動をもつて生きた二十代の青年藤岡蔵六の一面をよく伝えるものとなっている。

ところで、この時期、蔵六は新カント派の人々から大きな影響を受けるのであつた。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、ドイツで勃興した新カント派の哲学は、蔵六の大学院時代に日本でも人気を得ていた。新しい理想主義の哲学は、多くの可能性に満ちたものとして迎え入れられたのである。当時京都帝国大学大学院にいた一高時代の友人井川恭も、マーブルグ学派のシュタムラーや西南ドイツ派のラスクの法哲学理論

を、熱心に探求していた。⁽⁹⁾ それは『批判的法律哲学の研究』⁽¹⁰⁾などに結実する。

やがて蔵六は、ドイツの哲学者で、マールブルグ大学教授のヘルマン・コーエンのカント哲学を止揚しようとする方法論にひかれるようになる。「コーエンの思惟内容産出説と其批評」(『哲学雑誌』第400号、404号、一九二〇・六、一〇)は、そうした彼の姿を示すものなのである。この頃が蔵六の研究者として最も脂の乗った時期であった。彼の初の著作は、『⁽¹¹⁾純粹認識の論理学』である。が、早い時期の大著の出版は、彼の場合決して喜ばしいものではなく、逆に不運な人生の種まきとなってしまうのであった。その詳細は後述べることにしている。

さて、ドイツの学界を風靡していた新理想主義の哲学は、第一次世界大戦中の日本の学界にも強い影響を及ぼしていたのである。西田幾多郎の著作は、その代表格であった。西田の『自覚に於ける直観と反省』⁽¹²⁾は名著であり、東京の蔵六の友人芥川龍之介や松岡譲ばかりか、京都大学の大学院にいた恒藤恭(旧姓、井川)らの間でも話題になっていた。一高時代蔵六と親しか

つた恒藤恭は、前述のようにヨーロッパの法哲学の書物に目を通してマールブルク学派のシュタムラーやバーデン学派のラスクを読み、その翻訳を始めていた。その影響は蔵六にも及ぶ。

藤岡蔵六がマールブルク学派のコーエンに惹かれたのも、そうした同時代的関心によるのである。恒藤恭がラスクの訳書『法律哲学』を大村書店から刊行するのは、一九二一(大正一〇)年二月のことで、彼の処女出版であった。蔵六の『⁽¹³⁾純粹認識の論理学』の紹介より七か月ほど早い。当時の知的青年にとって新カント派の哲学は魅力に満ちた存在として写ったのである。が、『⁽¹⁴⁾純粹認識の論理学』は、やがて雑誌『思想』誌上で和辻哲郎によって、常識を絶したような批判の言説を浴びることになる。それは蔵六がヨーロッパ留学中の出来事であった。

八 ヨーロッパ留学

前後するが、蔵六は大学院在学中の一九二〇(大正九)年二月、中尾清恵と結婚した。それ以前に彼には

一高時代の友人井川恭の妹サダ(貞と表記されるが多かった)との結婚の話もあった。ややエピソードめくが、そのことに触れておこう。

一九一七(大正六)年四月一日付の芥川の井川恭宛書簡に、以下のような文面が見られる。井川からの問い合わせに心えたものである。

藤岡君の件について藤岡君にさつする意志をへあれば確にいい縁談だと思ふ。いや僕は君の妹さんをよく知らないからその知らないことも勘定に入れての上でだが

但藤岡君には今縁談が一つあつてそれが着々進行中らしい。どの程度まで進行してゐるか最近に会はないから知らないがもう見合ひもすみはしないかと思ふ。僕はあした東京を去らなければならぬので会つてゆくひまがないが君の妹さんの事には少しもおぼしらずに今の縁談がどの位進んでゐるか手紙で聞いて見てもいい

もし或程度まで進んでゐるとすると僕はそいつを打壊すのはとても恐しくて出来ない

ボクはどんな意味でも人の運命に交渉を持つ事にはこの頃益々神経質になりつゝある。

井川恭は、妹のサダを殊のほか可愛がつていた。サダは一八九四(明治二七)年三月十一日の生まれなので、蔵六の三歳下に当たり、年齢的つりあいは申し分なかつた。数年前、松江の井川の家を訪問した成瀬正一は、「日記」に、「二三と道を迷つた末、井川君の家へ来た。井川君の妹が出て来た。井川君によく似た声で顔もよく似てる」(一九二二・八・一五)と書きつけたが、美しく、しかも性格のいい少女であつた。その時十八歳だつたサダは、すでに二十五歳になり、婚期を逸しようとしていた。妹思ひの井川恭は、友人で信頼のおける藤岡蔵六との縁談を望み、芥川に斡旋を依頼したのであつた。が、この話は先に来た中尾清恵との縁談がまとまつたため実現しなかつた。芥川のこの時の井川への便りはかつて吉田弥生という縁談が進行中の女性にプロポーズしようとして、結局、無残な結果に終わっただけに、実感が籠もつてゐる。

ところで、藤岡蔵六の妻となる中尾清恵は、富山県

魚津の酒造家大野彦次郎の娘であるが、当時中尾ゆき（実姉）の養女となっていた。清恵は一八九八（明治三二）年一月六日生まれなので、蔵六とは七つほどの年齢差がある。蔵六の長男藤岡真佐夫によると、「母は負けず嫌いで徒競走はいつも一番だったし、日曜学校も何年間か皆勤で当時珍しい世界地図を賞に貰い私もよくこれを見ていた。母は地元の師範付属小学校を終えてから東京へ出て日本女子大学付属女学校に入り、ついで同大学英文科へ進んだ」とあるから、開明的で、賢明な女性であったのだろう。清恵は当時の女性としては最高の教育を受けたことになる。彼女は卒業直前に在学のまま蔵六と結婚し、小石川区白山御殿町に住んだ。そして翌年四月二十八日、長女美智子（戸籍上はみち子）を生む。かくて蔵六は研究が順調に運び、家庭生活では長女を与えられ、幸せな日々であった。

一九二二（大正一〇）年七月上旬、藤岡蔵六はヨーロッパ留学に旅立つ。留学前には桑木蔵翼の推薦もあって、東北帝国大学に新設される法文学部の助教授の口が内定していた。彼は未だ二十九歳、希望に満ちていたのである。留学中に岩波書店から『エン純粋認識

の論理学』が出ることは、先にふれた。刊行日付は一九二二（大正一〇）年九月十日なので、彼が自身のコ―エン研究書を実際に手にしたのは、留学先のフライブルク大学に着いてからのこととなる。

藤岡蔵六が諸先輩を出し抜いた形で東北大学の職場の口を内定し、在外研究の権利まで得たのは、東京帝国大学文科大学の副手を勤め、井上哲次郎と桑木蔵翼両教授に可愛がられたことによるのであろう。もっとも就職内定の事情には、後で詳しく述べなくてはならないのだが、いくぶん不明瞭な点があったようである。出陣の「藤岡事件とその周辺」によると、「どうやら藤岡が、留学前か留学中に、文部省の或有力者（松浦鎮次郎だったか）との縁故をたどって東北帝大の総長（横井時敬だったか）を動かして、直接に総長とのあいだにだか、或いはその文部省の有力者を介してだつたか、とにかく、やがて東北大に新設されるはずの法文学部の純哲担当の教授か助教授かの席が藤岡に予約されていたものらしい。これは、結局、東大哲学科卒業の先輩をだしぬいて席を占めようとする一種の闇取引とみえた」と書くような事情があつたのである。

蔵六としては何らやましいことはなくとも、先輩・後輩関係のうるさかった当時にあつては、批判の対象とされてもいたし方なかつたのである。在外研究一つとつても、この時点では、彼と同輩連中、いや少し上の先輩すら、未だ時に恵まれていない。一高の同級生で京都帝国大学の教官になつた小栗栖国道は、一九二二(大正一一)年、恒藤恭は一九二四(大正一三)年に機会が訪れるが、蔵六のコーエン訳述書を誤訳だらけとけなすことになる東大の先輩和辻哲郎に至つては、在外研究でドイツに出かけるのは、一九二七(昭和二)年のことである。蔵六には早すぎた在外研究の話であり、出し抜け行為とならないためには、周辺の意見を広く求めて決める性質の事柄であつたのだ。が、彼はチャンス到来とばかり、他者に相談することなく、一人で決心し、いさんで留学の途に着くこととなる。

副手時代の藤岡蔵六は、とにかく勉強一筋で、他者を配慮することが少なかつた。つき合ひも少ない。彼は時間を惜しんで勉強したのである。仲間と一緒に酒を飲んで騒いだり、酔つた頭で議論を交わすということが苦手だつた。そうしたことは時間の無駄とも思わ

れたのである。彼はひたすら自己に閉じこもり、勉強に励んだ。芥川や久米正雄・成瀬正一・松岡譲らが、第四次『新思潮』創刊前夜、毎日のように会つては互いに刺激し合つたのにくらべ、蔵六は唯一人研究室にこもつて研究に精を出すというふうであつた。

一緒に副手を勤めた出隆にも、就職や在外研究のことを一言も語らなかつたという。出隆は『出隆自伝』で蔵六を評して、「隠さんでいいことまで隠してひとりやる。むろんプライバシイには絶対に立ち入らせない。だからうしろめたいことをしていても、かんぐられ易い損な性格、そういう性格の現われを僕は、一緒に副手だつたときから、しばしば見せつけられていた」と書いている。蔵六には彼なりの生活哲学があつた。それは祖父元甫、父春叢ゆずりのもので、他人がどう思おうと、自分が正しいと信じる道を行くというものであつた。

ドイツに留学してもそうした性情は変わらなかつたようだ。彼はとかく自分の世界を好み、自己本位の生活に徹した。他人を批判することもなければ、逆に誤解されても、弁解をしなかつた。そして、自分さえ正

しなければよいという立場をとった。彼は大勢でわいわい言い合うことよりも、一人沈思して考えることが好きだったのである。そういう彼の生き方は、芥川や恒藤恭や長崎太郎など、一高時代からの蔵六を知っている者には、好ましい気質として理解できたものの、交際のない連中には、人交わりの適合性を欠くとして、不見識に写ったのかも知れない。異境の地ドイツにおいても、そつであつたから、とかく彼は除け者扱ひされた。

彼は他の人事には、無頓着であつた。自分が東北帝國大学に新設されるポストに、先輩を差し置いて就職することが、どのような波風を立てるかを推し量ることさえできなかった。彼はようやく就職が内定し、外国に留学できる機会が与えられたのをひとり喜び、ひたすら己の道を歩むのであつた。

当時、文部省派遣の在外研究（留学）の期間は、二年となつてゐた。そして半年、もしくは一年の延長が認められていた。条件は給与の三分の二が留守手当として支給され、あとは文部省の規定による在留費が月々四〇〇円位支給された。さらに願い出によつては、

国から国へ移る場合は、移転旅費も支給される仕組みであつた。しかも、第一次世界大戦後の日本の円は強く、一年間の支給額で二年は在留できるとされたほどである。まさに留學生黄金時代であつたのである。それだけに多くの研究者が在外研究を希望した。蔵六は留学期間を半年延ばし、一九二四（大正一三）年一月に帰国する。彼はドイツを根拠に、フランスやイタリアに旅し、帰国に際してはアメリカ各地も見て回つた。

藤岡蔵六のヨーロッパ留学は、単身で行われた。當時は私費でないがぎり、家族同伴はならなかつたのである。彼は結婚一年半の妻を渋谷区幡ヶ谷本町の実家に残して旅立つた。先に記したように、一九二二（大正一〇）年七月のことである。一等船客の旅であつた。藤岡真佐夫の『父母の思い出とともに』によると、船の中では毎日正装してティナーに出たという。学問一筋、謹厳な蔵六にしては珍しい。船はフランス南東部のマルセーユ行きであり、四十日間の旅であつた。

フランスに着いた蔵六は、当初はマルブルク大学に行く予定であつたが、予定を変えてエドモンド・フッサール（Eusser, Edmund）が教授をしていたフライ

ブルク大学に行き、現象学を学ぶことになる。フライブルクはドイツ南西部、スイスとの国境近くに所在する美しい都市である。ゴシック式の大聖堂と総合大学フライブルク大学の存在で知られる。ぶどう酒や酪農製品の集散地でもある。近くにボーデン湖があつて、ボートが楽しめる。蔵六は休みにはイタリアやスイス旅行などもしている。

フッサールは現象学の創始者とされ、ハイデッガーやサルトルをはじめとする現代哲学に多大な影響を与えることになる哲学者である。藤岡蔵六がフッサールのもと、現象学を学ぼうとしたのは、それなりの意気に燃えていたからなのであろう。すでにヘルマン・コーエンの名著『純粹認識の論理学』の翻訳(訳述)を出版した彼としては、次は現象学だとねらいを定め、ひそかに期するところがあつたのである。(以下次号)

注

(1) 藤岡蔵六『父と子』私家版、一九七一年九月(日付なし)

(2) 小著『恒藤恭とその時代』日本エディタースクール出版部、二〇〇二年五月三〇日

(3) 井川恭「むさし野」『松陽新報』一九二二年二月二一、二四日、のち山崎時彦編『若き日の恒藤恭』収録。

(4) 芥川龍之介「気鋭の人新進の人 恒藤恭」『改造』一九二二年十月、のち「恒藤恭氏」と改題「梅・馬・鷲」収録。

(5) 井川恭「翡翠記」『松陽新報』一九一五年八月連載。寺本喜徳編の『翡翠記』復刻版(鳥根国語国文会、一九九二年四月五日)がある。

(6) 出隆『出隆自伝』(『出隆著作集7』) 勁草書房、一九六三年一月二〇日

(7) 「赤城の山つづじ」の初出は、『松陽新報』一九一三年七月二六日、二三日、のち恒藤恭『旧友芥川龍之介』収録。

(8) 『東亜之光』は一九〇六年五月創刊。蔵六がかかわった時代は、東亜協会の刊行。

(9) 注(2)に同じ

(10) 恒藤恭『批判的法律哲学の研究』内外出版、一九二一年一月一〇日

(11) 藤岡蔵六『純粹認識の論理学』岩波書店、一九二一年九月一〇日

(12) 西田幾太郎『自覚に於ける直観と反省』岩波書店、一九一七年一月五日

(13) 藤岡眞佐夫『父母の思い出とともに』私家版、一九九八年一月(日付なし)

(14) 注(6)に同じ